



THE KAHALA

HOTEL & RESORT
YOKOHAMA

第5回

「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」、 そのデザインから考察する未来への深い思い

「みなとみらい21」計画の真打の役割も担う「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」。斬新な建築デザインの奥には、ハワイ、そして横浜の未来を思う意味が隠されている。

横 浜におけるホテルの歴史は、まさに我が国の都市開発の歴史と重ね合わせてみるることができる。1860年に日本最初のホテルといわれる「横浜ホテル」が開業、その後関東大震災により横浜全体が壊滅的なダメージを受けることになるが、「ホテルニューグランド（1927-）」が震災復興のシンボルとして開業する。終戦後「関内・伊勢佐木町エリア」と「横浜駅周辺」のふたつに分かれてしまった横浜の中心性をつなげるとともに、東京の近郊都市としてではなく、自立した都市として生まれ変わるために計画されたのが1983年着工の「横浜みなとみらい21」だった。これに合わせ、開発を象徴するランドマークタワーの「横浜ロイヤルパークホテル（1993-）」や「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル（1991-）」が開業する。そして約40年にわたり続いてきた「みなとみらい21都市開発」の一旦の完成と捉えられているのが、国内最大級の複合MICE施設であるパシフィコ横浜の新館である「ノース」と「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」が形成する20街区の開発である。このように見ていくと、時代を象徴するホテルが都市のあゆみをよく表しているのがわかる。

さて、このような文脈に位置づけられる今回の「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」であるが、まず特徴的なのはその外観である。建築の形態の

コンセプトは寄せては返す波打ち際を意味する「汀（みぎわ）」であるという。建物単体の形態だけではなくエリア一帯の連続性が織りなす群造形を重視するみなとみらい開発においては、横浜市だけでなく、みなとみらい進出企業で構成される一般社団法人横浜みなとみらい21や、横浜市景観アドバイザーである横浜国立大学の教授も交えて、何度も議論を重ねてデザインをブラッシュアップしたという。大胆な曲線を用いた海側の立面は地上から見上げてても壮観で印象的である。さらに白を基調としたインターコンチネンタルホテルからの連続からみても、青みを強調したガラスファサードを採用したのは野心的であるといえ、協議に相当な時間と労力を要したのがうかが



「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」の特徴的な外観。エレガントに弧を描く青いガラスファサードは、今後長きにわたって横浜「みなとみらい地区」のシンボルマークとなることだろう。

える。今回建築設計からインテリアデザインまでを一貫して担っている株式会社観光企画設計社の取締役常務執行役員であり、本プロジェクトのデザインを統括する清野修平氏にお話をうかがった。実は清野氏は横浜生まれ。

「タワーの鼻先はインターコンチネンタルホテルの帆形（凸状）と対比をなす波形（凹状）としてクイーン軸・キング軸先端の地区群景観を形成して欲しいという事業主の意向を受け、横浜インバウンド行政のMICE国際ホテルとして国際的な著名度の高い葛飾北斎の、「富嶽三十六景」の神奈川沖裏の浮世絵の構図に見立てました。幾重にも重なる神奈川沖の荒波をタワー外観、対照的に静かな汀を水盤で表現しました」

清野氏は語ってくれた。大胆な発想はこれまでのみたとみらいの変遷を見守ってきた清野氏ならではの応答によるものであった。

続いて内部を見ていきたい。インテリアデザインを担当する同社のプリンシパルデザイナー青柳亮氏と、デザインディレクター五島槇子氏にも話を伺った。インテリアのデザインコンセプトは「クリスタルモダン」。きらめきを伴ったクリスタルのコンセプトは、海の輝きや透明感をとらえたものであるという。多くの多面体がモチーフとして用いられ、光を複雑に反射するフラクタル（自己相似形）なインテリアはきらびやかでありつつ、エレガントな印象を与える。一方で本家であるハワイ「ザ・カハラ・ホテル&リゾート」のファンにとっては、ハワイのイメージを期待する向きもあるかもしれない。しかしここではあえて「表層的なハワイの模倣」は周到に回避されている。たとえばロビー空間。ハワイでは開放的で内外の隔たりを感じさせないシンプルで無機質な柱梁によるスケルトン建築の中に、ホテルの象徴でもあるクラフト感あふれるベネチアンガラスに彩られたシャンデリアが配置されるという空間構成であるのに対して、横浜では高さ5mの窓面でダイナ

ミックなパノラマビューを演出するシャープな空間に、波をイメージした有機的な形態のクリスタルビーズシャンデリアを配置する形で応えている。シャンデリアとその下に配置されたシーティングセットという空間構成も継承しつつ、意匠は横浜独自のコンセプトに基づいてつくられたという。また、シャンデリアの素材を壁面の燭台など、他の要素にも転用させる手法も継承しており、横浜ではシャンデリアのクリスタルビーズはエントランスホールのブラケットライトとして用いら

れている。このように、あえて「表層的なハワイ」ではなく、ハワイの「ザ・カハラ・ホテル&リゾート」の

空間を形式付ける「型」を読み取り、その本質を継承するというコンセプトに至っている。一方で、ハワイ特産の木材であるハワイアンコアをモチーフとした温かみのあるラウンジ&バー天井の仕上げや、民族的なタトゥーやハワイアンキルトに用いられるトライバル文様を意識した幾何学的なロビー天井のデザインなど、隠されたハワイへの伏線も忍ばせている。開港の時から異文化を受け入れて来た文化をもつ横浜だからこそ、新たな融合に挑戦する場としてふさわしいと言える。客室インテリアは広々と落ち着きのあるデザインに仕立てられているが、特に窓から眺める夜景は格別で、ベイブリッジを中心とした横浜湾岸が一望できる贅沢を味わえるだろう。共用部も圧巻の充実ぶりで、地上階に面した巨大な水盤はインドアプールやアウトドアプールデッキと相まって海との圧倒

ハワイへの憧憬が、 意外な部分に見え隠れ



ハワイ「ザ・カハラ・ホテル&リゾート」のロビー空間（左）と、横浜のロビー天井に応用された、ハワイアンキルトに似た幾何学模様。

的な一体感を享受できる。

さて、海といえば「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」を訪れる際は、横浜駅からタクシーで向かうか、新高島駅からキング軸のペDESTリアンデッキを歩いていくのが大半かと思われるが、あえて海からのアプローチもお勧めしたい。それは海上交通である「シーバス」。その乗り場は横浜駅東口からベイクォーターまで数分歩いた場所にある。そこから10分でホテル最寄り乗り場である「ぶかり棧橋」に到着する。さらに臨港パークを歩いていくと、海側からホテルの特徴的な外観が特別な高揚感とともにゲストを迎えてくれる。赤レン

ガ倉庫や山下公園へもこのシーバスで行くことができるので、市内観光のきっかけとしても利用価値が高い。近年ではこれに加えて、羽田空港から船で横浜にアプローチする海上交通も整備されはじめている。現在はまだ日曜日の一便だけだが、羽田空港船着場から横浜「ぶかり棧橋」までを結ぶ定期便が2014年から運行を開始しており、今後はさらに拡充されることだろう。

このように「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」は、施設としての充実は申し分ないが、前述の清野氏の目線はさらに壮大なものであった。「横浜の歴史は開港まで遡れば約160年。長い歴史とも

過去を考えることも大切。
しかし視線の先には未来がある

思えますが、これからの160年を考えていかなければならない。160年後に振り返れば、「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」こそ、新しい横浜のルーツであったということさえあり得ると思っています」。そう言われてみると、キング軸と言われるみなとみらい地区の主軸の突端に位置し、「みなとみらい一丁目一番地」という住所をその名に冠するこの場所は、V字型にひろがる横浜港のちょうど喉元に位置する。100年単位の時間軸で考えてみれば、この地域を中心とした新たな横浜の可能性は現在の我々が想像できる姿をはるかに超えたものであるに違いない。

これまでの歴史に敬意と尊敬を抱きながら、延々と続く未来に対する「始点」としての責任を込めるという意味では、「ザ・カハラ」の名を冠する名誉を誇りにしつつ、気負いすぎることなく「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」とともにこれからの新たな横浜を見せてもらいたいと期待したい。その世界レベルのコンシェルジュサービスとともに、横浜のホテル史に新たな時代を導いてくれるだろう。

○宮崎晃吉（建築家／一級建築士）群馬県前橋市出身。東京藝術大学大学院修士課程修了後、「磯崎新アトリエ」に勤務。2011年に独立し、株式会社「HAGI STUDIO」代表取締役。一般社団法人「日本まちやど協会」代表理事を務める。東京藝術大学建築科非常勤講師。

「ザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜」のエントランスロビー。都会的でシャープな印象を与えるが、随所に本国ハワイへのオマージュを込めた意匠が隠されており、ストーリー性にも満ちたエレガンスをこの空間が体現している。

